

五台山六月大会の復興と日中戦争——「小川貫式資料」にみる五台山

藤井 由紀子

はじめに

山西省五台山では、今年も昨年について今事変後第二回の所謂六月大会、すなはち喇嘛の大誓願会が六月二十五日から一ヶ月間盛大裡にとりおこなはれた。私はこの法会を機に年来の宿願がかなつて五台山に巡礼することができたのは何よりの幸であつた。

さて山では顕通寺に駐在の酒井盛典氏、菊地宣正氏等の御好意によつて名利史蹟を巡礼し、金石碑幢をたづね、西藏文漢文の各種刊本大藏経を一々したしく披見することができたこと等、望外の喜びが数多くあつた。いまその一々を述べる余裕はないが、法会中、七月六日に日本求法僧の慰霊祭が五台山中の古刹顕通寺で行はれ、筆者もこれに詣して勝縁に逢ふことができたのであつた。¹⁾

これは、中国仏教史、特に大藏経研究で知られる小川貫式（以下、貫式と略称）が、昭和十六年（一九四一）、中国山西省の五台山を訪れた時のことを、振り返つて記した一節である。文中に「日本求法僧の慰霊祭」とあるように、日本で最初に五台山を訪れた入唐留学僧、興福寺靈仙に關する論考の、その書き出し部分にあたる。貫式は龍谷大学で中国仏教史を学び、以後、生涯にわたつて同学で教鞭をとつた研究者であるが、昭和十四年（一九三九）三月、仏教史学科の修了後すぐに、興亜留學生として中国に赴いており、この論考は、彼の帰国直後、「入唐僧靈仙三藏と五台山」のタイトルで、『支那仏教史学』という學術雜誌に發表された。ただし、論考の内容自体は、靈仙の事績について詳細に検討を加えたものではなく、五台山で靈仙を中心とした日本僧たちの慰霊祭が行われるにあつて、長安で訳経僧として活躍したのち、五台山に赴いて

客死した、という彼の数奇な運命を略述した形となっている。

さて、上記の文章のなかで貫式は、年来の宿願がかなったすえの五台山巡礼を喜んでいるが、しかし、実のところ、この五台山訪問も含めて、彼の中国留学は、単に仏教史研究者として中国の地に学ぶことを目的としていたものではない。当時、日本と中国とは、盧溝橋事件の勃発を契機に、二年前から日中戦争に突入しており、「興亜」という語がそこに冠せられているように、政府の意向をうけて推進された西本願寺の中国開教策と関わって、龍谷大学の若き研究者たちを中国に派遣したのが、この興亜留学生だったからである。渡中後、南京や北京に滞在したのち、貫式が五台山を訪れたのは、昭和十六年（一九四一）七月であったが、その頃にはすでに五台山のある山西省という地域が、治安戦の名のもと、日本軍による激しい侵攻を受けていたことを考えると、^④五台山で六月大会という誓願会が盛大に行われていた事実や、そうした行事への参会も含めて、嬉々とした様子で五台山について語るその文調には、正直、驚きを禁じえないものがある、といつて過言ではない。

以上のように、小川貫式は西本願寺の興亜留学生として中国に派遣され、特に山西省を中心に仏教史跡の調査研究を行ったが、この貫式の中国での動向に注目することで、日中戦争下、日本人研究者が五台山で行った活動について、具体的に明らかにしていくことが、本稿の目的である。そして、こうした戦時下での五台山研究という問題を取り上げる、その契機となったのが、昨年三月、岐阜県各務原市の西巖寺調査に^⑤

おける「小川貫式資料」の発見である。^⑥先述したとおり、貫式は龍谷大学で教鞭をとった中国仏教史学者であるが、彼はこの西巖寺に生まれ、住職をつとめた浄土真宗本願寺派の僧侶でもあり、本稿にいう「小川貫式資料」とは、その貫式の自坊から発見された、彼の自筆原稿を中心にした新出資料群を、^⑦便宜的にそう呼んだものである。^⑧本論でも述べていくように、興亜留学生として中国に渡った貫式は、日本陸軍の特務機関と連携しながら、山西省を中心に仏教史跡の調査研究を行っていたらしく、今回の新出資料にも約百点ほど、日中戦争下での自筆調査メモや写真、さらには、日本陸軍が作成配布したと考えられる印刷物が含まれている。この日中戦争時、日本人による中国研究が目覚ましい進展を遂げたことは、現代の研究者間でも自明の事実ではあるにせよ、こうした資料類を直接目の前にすると、改めてそのことを歴史的に検証しておく必要があるのではないかと考えるに至ったのである。^⑨

周知のように、平安時代以降、靈仙、円仁、円覚、惠尊、惠雲、宗叡、齋然、寂昭、成尋など、名だたる僧侶たちがこの地を巡礼し、仏教文化を将来してきた五台山は、中国の数ある仏教霊山のなかでも、日本人にとって特別な地であるといつてよい。それゆえ、日中戦争勃発以後、貫式のみならず、仏教史関係の日本人研究者たちがここに次々と入山した。著名なところでは、外務省文化事業部の留学生として中国に派遣された日比野丈夫、小野勝年の両氏が知られるが、^⑩その他にも、高原一道、酒井真典、三上諦聴ら、日本の仏教各宗派から派遣された諸氏た

ちが入山し、伽藍復興や調査活動を行っていたとみられる。そして、彼らのなかには、紀行文を残した者もあり、その内容を見ると、貫式と同様、研究者たちの多くが、戦争の真新しい痕跡を眺めつつも、この靈山に入山する機会を与えられたことを僥倖と感じていた様子がわかる。むしろ、そうした感覚は、その当時としては特別なものではなかったかもしれないが、戦後、中国との国交回復の難しさを知る立場からすると、日本の歴史学の学問としての発展が、こうした時期を経て齎されていたことに、やはり注意を向けざるをえないのである。

客観性と実証性に基づいて行うことが第一義とされる近代学問であっても、時代というものからは決して自律的にはなりえないのではないか。日中間で戦争が繰り広げられていたこの時期、山西省だけをみても、歴史学以外に、地質学、動物学、植物学、考古学、美術史学など、実に多岐な分野にわたって、日本人による調査研究が進められていたことが諸書によってわかる。そして、それらの活動のほとんどが軍の支援を受けて行われていたことを考えると、学術調査の名目のもと、日本陸軍は戦略の一環として、中国のあらゆる情報を収集することに余念がなかったもの、とみてよい。それだけではない。日中戦争勃発の翌年、時の内閣が出した「東亜新秩序」声明に象徴されるように、この当時、日本では、中国侵略の正当性を謳うため、日本を中心とした新しい東アジア世界の建設を大々的に掲げており、そのことは結果的に、中国を対象とした各分野の学問を進展させる追い風となった。もちろん、仏教史や

日中交渉史の分野でも、この追い風に乗って、実に多くの成果が挙げられていったのであり、興亜留学生であった貫式もまた、そうした趨勢のなかに身を置いた人物であった。そこで、本稿では、その彼が残した新出の「小川貫式資料」に基づいて、山西省での中国仏教史に関する学術調査の一端を明らかにすることで、戦争という特異な状況下、学問が発展をみせていった、そのことの歴史的意義について考察する手がかりを探ってみたい、と考えている。

一 西巖寺蔵「小川貫式資料」から見た五台山

興亜留学生として中国に派遣された貫式は、五台山ではどのような活動をしたのであろうか。本章では、「小川貫式資料」の内容を確認しながら、まずはこの点について紹介することから始めていくことにしたい。

現在、西巖寺に蔵されている「小川貫式資料」のうち、五台山関係のものは大きく二種類に大別される。ひとつは、貫式自筆の調査メモ類で（挿図1）、そのほとんどが原稿用紙に書かれており、一部、陸軍の野線紙や北京美術学校の便箋を利用したものがある。同朋大学仏教文化研究所では、今年度より「小川貫式資料」の整理作業に着手したが、予想外に資料数が多く、自筆メモ類について記載内容にまで踏み込んで、その詳細を検討することは未だできてはいない。しかしながら、資料群を概

観するに、成文的なものは少ないことから、これらは主に山内の諸寺院を探訪した際の覚書か、『清涼山志』など、貫弑が参考にした史書類の抜粋とみられる。以下、彼が各資料の最初のページに書き記した標題にしたがってすべて列記すると、次のようになる。

〔五台山六月大会を迎へて 入唐求法の靈仙三蔵を偲ぶ〕（※新聞記事の草稿）

〔五台山六月大会見学雑記〕

〔写在『東亜仏教大会』之前〕

〔五台山金石目録〕

〔五台山金石碑目〕

〔五台山金石刻文備忘録〕（※表紙のみ）

〔五台山と大蔵経〕

〔五台山頭通寺漢訳大蔵経 北蔵〕

〔明北蔵攷〕

〔殊像寺碧山寺北蔵五台山蔵経〕

〔南蔵〕

〔羅睺寺南蔵〕

〔大明統諸経未入蔵者添進蔵函序〕

〔（五台山調査メモ）〕（※標題なし）

〔五台山資料 考証・校勘録〕

〔五台山文殊圖像〕

〔清涼五台山叢書〕（※草稿）

〔清涼五台山叢書出版計画〕（※藁半紙に印刷されたプリント）

〔二木班作業報告〕（※プリント）

残念ながら、五台山での貫弑の行動が把握できる、詳細な日誌類や紀行文はここには含まれていないが、貫弑が金石碑や大蔵経について特に関心を持ち、それを重点的に調査していたことがわかる。なお、これらのなかで異彩を放っているのが、「清涼五台山叢書」と題された自筆の草稿らしきものと、それとおそらくは対応する「清涼五台山叢書出版計画」という一枚のプリントである。そして、この二点の資料から推測するに、貫弑には五台山の歴史について五冊組の叢書にまとめる構想があったとみられ、果たして草稿の最初のページには、「第一冊 清涼三伝 二百五十頁／第二冊 清涼山志 重修増補 三百頁／第三冊 清涼山新志 三百頁／第四冊 清涼五台山文献輯彙 二百頁／第五冊 清涼五台山図録 百頁」という構成が記され、次ページには、第五冊目の図録に関して、唐から中華民国時代まで、時代順に各図を紹介するプランが記されているが、この第五冊目の冒頭には、唐時代の壁画よりも前に、日本陸軍参謀本部による「五台山地勢図」が挙げられている点、五台山の地理をまず提示しようという企図ではあるにせよ、時代の空気を感じさせる章立てとなっている。²⁰

さて、「小川貫弑資料」の五台山関係の資料群のもうひとつは、スクラップブックに貼付された約百五十点の資料である（挿図2）。西巖寺

には、貫式自身が作成したと思われる、中国関係のスクラップブックが六冊残されているが、そのうちの一冊は山西省に関する冊子で、五台山についても、当時の新聞記事や写真・絵葉書、陸軍の特別宣伝班や新民会が発行したパンフレット、レジュメ、チラシなどの印刷物のほか、乗車券や弁当の品書きに至るまで、貫式がその行程や山内で手にしたさまざまなものが、台紙八十二枚にわたって丁寧^②に貼りこまれている。便宜上、本稿では、これを「山西省スクラップブック」と呼ぶことにするが、これを参考にすると、自筆資料からは見えてこなかった、貫式の五台山での活動の様子がある程度補充することができる。そこで、これらスクラップ類をいくつかに分類し、それぞれについて、以下、簡略に言及しておく。

まず、新聞記事の切り抜きが挙げられる。文字通りのスクラップで、あくまで日本側の立場からの報道ではあるが、貫式の入山時の五台山をめぐる政治的な状況や、貫式が五台山で行った調査の成果などを知ることができる。たとえば、『陣中新聞』の「五台山物語」と題された連載記事には、「蟠踞する共匪討ち 皇軍入山に沸く歓呼」とか、「一ヶ月続く大法会 東亜に和平の息吹き」といった見出しが大きく躍っている、その記事内容から、八路军と通称された中国共産軍が五台山を占拠し、そのために六月大会が中断してしまったこと、日本陸軍はこれを駆逐して山内を鎮静化し、昭和十五年（一九四〇）には復興第一回目の六月大会を華々しく行ったことなど、五台山で復興六月大会が開催される

に至った経緯が把握できる。さらに、『朝日新聞』北支版の昭和十六年（一九四一）九月二十七日号には、「仏教史上の大発見 五台山にかくれたる経文など 日華提携に貴重な資料」という見出しで、太原の上村特派員が、貫式の山西省での活動成果を具体的に報じている。興味深い記述が含まれているので、その一部を引用しておく、

山西省にあつて支那仏教史を専攻する一留学生により世にも稀な経文、西夏文字その他得難い文献の数々が発見され、わが仏教、史学両界の間に貴重な記録として保存され、さらに各方面より深い研究がすゝめられるべく多大の期待がかけられてゐる、発見された支那古代の文献といふのは

金刻大方広仏華嚴經合論二帖刊記、西夏文藏經扉画断片、元管主

八五台山施經秘密大乘經一帖刊記、日本国僧慶政補刻大方広仏華嚴

經第二、拱二

など計十一種、西本願寺留学生であり龍谷大学支那仏教史専攻の小川貫式氏はさきに山西省特務機関の依頼をうけ支那隨一の聖境五台山の碑文研究のため来原したが、ひきつゞき同山頭通寺住職^{職別除貫式直筆修正}、山西省特務機関嘱託菊池宣正師の援助をうけ太原市崇善寺に元版大蔵經を調査研究中にもかかわらず右の貴重な文献を発見し得たのである。～（中略）～ 今回の発見により仏教文化史上に日華提携の貴重な資料を齎したものととして各方面より歓喜をもつてむかへられてをり

小川氏の帰国後学界ならびに仏教界に発表される予定である、なほ十一種の文献はちかく太原博物館に保存されることとなつた²²⁾

(※スクラップブックに貼付された新聞記事に、インク書で貫式が直接修正)

とあつて、貫式の五台山調査は山西省の特務機関の要請によるものであつたことが明記されている。ちなみに、貫式の発見した資料は、太原博物館に保存されることになつたとあり、これらは日本に持ち帰られることなく、山西省の地にある博物館に収蔵されたい²³⁾。特務機関については、次章で改めて触れていくが、この陸軍の特務機関の支援のもと、貫式はいくつかの発見をもつて、その調査に一定の成功を収めていたことがわかる。

次に、「山西省スクラップ」で注目されるのは、日本陸軍の特別宣伝班や新民会が制作し、配布したとみられる各種の印刷物である。五台山の六月大会に関するポスターやチラシ、パンフレットのほか、式次第や資料レジュメ、散華やピラのようなものも含まれている。どれも当時の五台山で行われた行事のひとつひとつと直接関係を持つもので、非常に興味深い²⁴⁾が、そのなかでも一点、特に目を引くのは、「五台山六月大会参拝方法」という、新民会内に創設された五台山六月大会事務局が発行した折り畳み式のパンフレットである(挿図3)。新民会は正式名称を中華民国新民会といい、日中戦争開始後に日本軍が樹立した中華民国臨時政府を擁護するため、同じく日本軍によって北京に創設された、中国の民衆教化団体である²⁵⁾。そして、このパンフレットには、五台山の案内

図、五台山への時刻表、参拝に関する案内事項、六月大会の行事日程表などが一枚の紙に盛り込まれていて、大変に便利なつくりになっているが、その非常なる便利さも含めて、六月一日(陰曆)からの大会に向けて、中国本土から多くの人を集めようとする意図が汲み取れる点に、大きな特徴があるといつてよい。たとえば、「一、汽車割引」、「二、参拝路順」、「三、引導及住宿」、「四、貨幣交換所」、「五、其他」と、五項目にわたつて参拝者への手引きを掲載する、その一番最初に今回の参詣者に限つて汽車賃を割引すると謳われていることは、五台山へと人々を誘引する施策のひとつであつたことをうかがわせるが、ただしこの期間、五台山に参詣するには、各県の新民会総会長名で発行した「五台山六月大会参詣証明書」が必要であつたらしく、その証明書の具体的なフォーマットもここには併せて示されている²⁶⁾。さらに、このパンフレットには「本年五台山六月大会之特異性²⁷⁾」と題された解説があり、日本から大蔵経を奉迎する慶讃大法会が行われることをもつて、今回の六月大会はプレミアなものであるという宣伝を、そこに籠めた内容となつている。

次に、「山西省スクラップブック」には、五台山関係の写真が計七十九点、貼付されている。細かいことになるが、写真の大きさには大小があつて、一番小さい約4cm四方の正方形のものは貫式個人で撮影したもの²⁸⁾、それに対して、やや大判のものは写真の解像度も高く、軍などの機関が撮影したものと推測される。主に五台山内の様子を写したもので、東亜仏教大会や日本人求法僧慰霊祭と推測されるいくつかの写真も含ま

れている。そして、それらの行事も含めて、写真全般には日本の軍服を着した軍人がたくさん写っており、当時の五台山の雰囲気をよく伝えている。

さらに、上記以外に、「山西省スクラップブック」に貼付された資料には、貫弍個人の動向がわかるものはいくつかあり、なかでも華北交通の自動車券が興味をひく。「崞県―陽明堡―代県―繁峙―沙河鎮―茶房子―望海峯―台懷鎮」というように、五台山の中心である台懷鎮までの経路がスタンプとして捺されていて、貫弍が入山した当時、北京からの列車終点にあたる崞県駅から先、五台山へは華北交通によってバスルートが整備されていたことがわかる。この華北交通というのは、昭和十四年（一九三九）、日本の国策と連携して、南滿洲鉄道、いわゆる満鉄の流れを汲んで設立され、鉄道・バス・水上交通など、華北地方の交通の開発と運営を行い、旅客や資源の輸送を担っていた特殊会社である。なお、「小川貫弍資料」中には、『五台聖境』という新民会発行の五台山ガイドともいべき小冊子があるが、そのなかの挿図「五台山参拝途徑」に貫弍自身による書き込みがあり、ここから類推するに、貫弍は昭和十六年（一九四一）六月二十七日に北京を發つて、太原西本願寺に逗留したあと、七月三日に五台山入口にあたる代県に到着、翌日には中心街である台懷鎮に到着したとみられる。これに対して、貫弍に先立つこと二年、同じく龍谷大学の興亜留学生として中国に派遣され、昭和十五年（一九四〇）、第一回目の六月大会に参詣した三上諦聴の紀行文には、

北京を出發したのが七月十三日午後八時五十分太原直行の汽車、
（中略）
十六日、早朝司令部に西谷教授と挨拶旁々特別宣伝班に連絡に行く。六月大会に各地から集つた人々、雨の為に忻州河辺村まで行つては引きかへし一週間もうろくしてゐる人もあり、早くたたねば間に会はず、南廻りでは急にも行けず、北廻りの原平鎮崞県、代県、繁峙經由にて行かんと今夜の午前一時の貨物列車に客車一輛連結するといふ、之に乗ずる事を許されて、（中略）
眠れぬために荷物の棚によぢのぼり、荷物並にゴロ寝して夜明けに着いたは忻県、○○部隊の墓標に敬意を表しつゝ、何時つくともさだかならず（七時）忻口鎮、原平鎮と激戦の戦跡を通り抜けて正午頃に終点崞県に着く、此処から百二十軒のトラック行、八輛のトラック皇軍の宣伝班興亜院（蒙疆連絡部、藤井尊順氏（龍大出）等三名）各新聞社記者、新民会、映画班、劇団（支那）総計七十人余警備の兵に護られて崞県城内の特務機関に厄介になり、司令部に吉澤閣下（足利龍大学長従兄弟）に敬意を表し、五台の現状と仏教工作の御高見を聴き、昼食は持参の要もなく美味しい日本米に喜ぶ。午後三時八輛のトラック皇軍に護られつゝ、沙塵をあげて、右に五台山塊、左に勾注山に挟まれた平原の坦々たる道路を北行、陽明堡をすぎ（此処まで鉄道路盤あり）二時間にして有名な代州の巨城を左に見て、時間の関係上見学も出来ず、お客様の（八路軍）来襲の噂に

おびえつ、停車半時間、漸くたつて東行、繁時まで一時間、田舎の小縣城に着いたのが六時半、睡眠不足と貨物車の後尾に荷物と共にゆられ、後から二輛目前車の黄塵を浴びて又日光の直射に真赤になつてしまつた。³¹⁾

とあつて、彼の乗つた車の前後を陸軍が護送しながらの入山であつた様子が記されている。これは日中戦争下、華北を中心に抗日戦を展開した八路軍の潜伏を警戒してのことであり、その緊張のなかでの五台山入りであつたことがよく伝わってくる。華北交通のバスで入山した貫弑の場合と比べると、五台山をとりまく空気がかなり異なつてゐることは興味深く、新聞報道にもあつたように、貫弑入山時にはすでに抗日軍の動きは沈静化し、五台山全山を日本軍が完全に掌握してゐた状況が推定できるのである。

以上のように、「山西省スクラップ」中の資料からは、貫弑の五台山入山時の五台山をめぐる戦況や陸軍の動向が見えてくる。そこで、次章では、さらに「小川貫弑資料」から二、三点、興味深い資料に焦点をあてながら、五台山という中国有数の霊山が当時、どのような場として衆目を集めていたのかについて、特務機関と六月大会に特に注目することで考察を深めていくことにしたい。

二 五台山六月大会と日本陸軍

―日本を中心とした民族統合の新たななる聖地として

昭和十二年（一九三七）年七月七日、盧溝橋での日本軍への発砲事件をきっかけに、日本と中国とは全面戦争に突入した。この事件は日華事変（日支事変）と呼ばれ、これ以降、中国の領土を日本軍が次々と占領していくことになつた。そして、その四年後、日本はアメリカに宣戦布告し、戦局は太平洋戦争へと拡大していく。

昭和十三年（一九三八）、第一次近衛文磨内閣は、「東亜新秩序」声明を発表し、中国に対する侵略という日本への国際的批難をかわそうとした。それは、具体的には、日本と提携する新興政權を中国に樹立し、東亜和平を築いていくことで、日本の立場を正当化しようとする内容であつた。そして、そうした政府の方針をうけて、日本では「興亜」という言葉が盛んに使われるようになり、³²⁾それに伴つて日本精神や日本文化を中国に受容させる文化政策が推進され、仏教界でも中国開教に力が入れられていくことになつた。

昭和十四年三月研究科を「南宋仏教史研究」と題し、教団篇と教学篇の二冊にまとめて卒業が出来た。時恰も日本は大陸進出の戦時体制であり本願寺において中国に開教師派遣が盛んとなるにつれ、興亜留學生を募集して中国大陸の仏教事情を調査研究する必要性が認められ、北京へは三上諦聰、新野修基、中支へは私と海野の二人が派遣されること、³³⁾なつた。これは禿氏西光高雄諸教授の推薦によるものであつた。

これは「小川貫弑資料」のうち、昭和五十一年（一九七六）に貫弑自身

が記した「自筆履歴書」に添えられた「仏教史学を志して」という草稿の一部である。貫弑が興亜留学生として中国に派遣されたのは、「東亜新秩序」声明が発表された翌年、昭和十四年（一九三九）のことであったが、禿氏祐祥、西光義遵、高雄義堅といった龍谷大学の教授陣の推薦をうけたこと、かつ、それは西本願寺の中国開教策と連携したものであったことが知られる。興亜留学生については、本特別報告の中川剛「新出の西厳寺蔵「小川貫弑資料」について」を参照いただきたいが、時の内閣が出した「東亜新秩序」声明に浄土真宗本願寺派も呼応し、元・法主の大谷光瑞の意向のもと、西本願寺でも中国開教に力を入れるとともに、興亜留学生を派遣したのである。

さて、前章でも紹介したように、「小川貫弑資料」の資料的価値は、「中支」地域担当の興亜留学生として、貫弑が山西省を中心に調査を行った、当時の具体的な様子が明らかになることにある。そして、この視点に立つとき、最も関心を集めるのは、貫弑のような留学生を陸軍の特務機関が支援していた、という事実である。たとえば、冒頭で引用した『支那仏教史学』掲載の論文にあったように、³⁵五台山で貫弑を案内したのは、顕通寺に駐在していた酒井眞典、菊地宣正の両氏であったが、彼らとともに特務機関の嘱託の機関員であったことは留意しておいてよい。すなわち、「山西省スクラップブック」には、酒井氏の名刺があり、その肩書を見ると、「山西省特務機関嘱託／外務省在支特別研究員／酒井眞典／日本・高野山／中華・五台山」とあり、陸軍特務機関の嘱託の

研究員であったことが明確に知られるし、一方の菊地氏についても、同じく「小川貫弑資料」中の太原崇善寺関係の資料に「機関員」として登場していることから、やはり陸軍特務機関の一員であったことが判明する。³⁶さらに、この兩名は三上の紀行文にも登場していて、

丁度事変直前の昭和十二年五六月の頃、母校龍大より学兄小笠原氏小川氏等の来燕の予定あるを機会に、石家莊太原五台大同と仏跡探訪の旅を試みると計画中であつたが、たま／＼の事変の勃発にすべてはお流れとなり、残念に思つてゐた。今回皇軍の支援の下に、一昨年以來外界の事態に超然と山西の五台山に於て聖地の復興に身命を捧げてゐた高原一道氏、菊地宣正氏、酒井眞典氏等のためまざる努力の結果として、六月大会の開催は華々しい鳴物入りに宣伝された。今更宣伝につられるのであるまいが好機逸すべからずと登山の予定をした、が雑事にはままれて何等の準備もせずに、再遊の下準備にと出て行つた。³⁷

と、紀行文の書き出しにあるほか、七月二十日条には、午後六時より今度五台山に登山した日本僧侶の（各官庁につとめる在籍者をも含む）懇親会が顕通寺に開かれ、五台を中心に求法僧顕彰会等色々話ははずむ、集りしもの左の如し。

塚本洗月（西） 稲葉慶立（眞言） 西谷順誓（西） 吉兼正安（東）
河野弘（臨濟） 藤井弘（東） 禱隣（顕通寺住持） 友岡教善（西）
渡辺憲静（日蓮） 小川仁慈郎（山西特機） 菊地宣正（東） 三上諦

聴(西) 然琇(僧会長) 池尻糸導(西) 高原一道(西) 桜井圓信
(天台) 酒井真典(真言) 松島正見(曹洞) 平川博道(浄土)の
諸氏。³⁸⁾

とあって、酒井は真言宗の、菊地は浄土真宗大谷派の僧侶であったこと
や、両氏が日中戦争勃発直後から五台山に上山して、真宗本願寺派の高
原氏とともに五台山復興に尽力しており、その結果が復興第一回目の六
月大会の開催につながっていたことがわかる。これを要するに、陸軍の
特務機関は彼らのような学僧を、その囑託として意図的に採用してい
たものと思われる。⁴⁰⁾ 当時、特務機関は中国各地域に置かれ、後に興亜院へ
と名称を変えていくが、この興亜院では歴史文化や宗教習俗などはむろ
ん、中国に関するありとあらゆる種類の情報を収集していたことがわ
かっているから、その前身にあたる特務機関でも、歴史や仏教に関する
情報を収集していくにあたって、こうした僧籍と専門的知見を持った人
物を機関員に採用することで、情報収集の質と効率を上げようとしてい
たもの、と推測できる。果たして、自筆原稿類から金石文と大蔵経の調
査を重点的に行っていたことがわかる貫式もまた、特務機関の支援を受
けて山西省の調査を行ったのであり、その結果、貴重な発見をしたと新
聞に報じられたことは、前章でも紹介した通りである。このように、占
領先における情報収集という戦略的視点に立つとき、日中戦争下での軍
部と研究者との連携は、むしろ必然であったと理解できるのである。

もうひとつ、「小川貫式資料」を通して見えてくるのは、五台山とい

う中国有数の霊山が、日本を中心とする「東亜新秩序」を体現化して大
陸の人々に示す、そのための格好の舞台となっていた、ということであ
る。前章でも、「五台山六月大会参拝方法」という折り畳み式パンフ
レットを通して、昭和十六年(一九四一)の六月大会が特別なものとし
て大きく宣伝されたことを紹介したが、五台山で行われていた最大の宗
教行事であった六月大会の復興は、そうした軍部による「工作」⁴²⁾を最も
象徴していた、と考えられる。ちなみに、日比野丈夫によると、六月大
会とは、旧暦の六月六日から十日間行なわれる文殊菩薩を供養する大誓
願会のことを指し、文殊菩薩を供養し、あまねく一切の衆生が正覚を得
ることを願って、諸厄を祓うとともに、風雨の順調や五穀の豊饒など、
諸々の吉祥を得ることを祈る場であったという。もともとはチベット黄
教の改革者であった宗喀巴(ツォンカパ)がチベットの拉薩において始
めた行事で、第五代達賴喇嘛(ダライラマ)の時に五台山でも始まった
が、この第五代と清の太宗や世祖との間には交渉があったことから推し
て、確実な年代は不明であるにせよ、五台山における六月大会の創始は
清時代の順治年間(一六四四〜一六六一)以降のことだろう、⁴³⁾としてい
る。

そして、同じく日比野の言及にあるように、⁴⁴⁾この五台山での六月大会
は、大会の開催期間中、省内・省外から多くの商人を集めて市が開か
れ、牛馬や駱駝などを中心に交易が行われる、重要な機会でもあった。
明時代以降、活躍した山西商人の例にみるように、もともと経済の発達

していた山西省にあつて、中国各地はもとより、蒙古やチベットから、民族の壁を超えて人々が参集するこの大会は、単なる宗教行事に終わらない意味を持つていたと考えてよい。にもかかわらず、多くの商人を集めて交易が行われるこの重要な機会が、日華事変後、中断の憂き目を見たのである。本稿では、中国共産軍による五台山侵攻について、その正確な事実関係について論じる立場にはないが、「小川貫次資料」からは、一時中断となつた六月大会を、共産軍を駆逐することで復興させた日本軍が主張し、それを日本でも、中国でも、大々的に宣伝していたことが確実に導きだされるのである。⁽⁴⁶⁾そして、清時代、康熙帝がモンゴルに対する融和策として、五台山のチベット仏教化を図つたという指摘があるように、⁽⁴⁷⁾五台山が地理的にモンゴルと近接する、複数の異民族が混在する場であつたことを考えると、宗教的にも経済的にも要地であつた五台山を掌握し、この霊山の機能を日本仏教的な聖地として再構築していくために、多くの仏教関係の研究者を投入した、と想定できるのである。⁽⁴⁸⁾

それでは、日本軍によつて大々的に宣伝された昭和十六年の六月大会は、実際にどのような構成で行われたのであろうか。先に紹介した「五台山六月大会参拝方法」という折り畳み式パンフレットにも、詳細な行事予定表が掲載されていたが、ここでは同じく「山西省スクラップブック」に貼付され、日本軍特別宣伝班の署名のある「五台山六月大会寺院行事予定表」という、ガリ版刷のレジユメを紹介してみたい。

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫次資料」調査報告(一)

五台山六月大会寺院行事予定表

陰曆	陽曆	行事	寺院
六、一	六、二五	日本大蔵経奉迎(普化寺ヨリ菩薩頂へ行列 後贈呈式)	菩薩頂
自六、六 至六、一五	六、三〇 七、九	滕会道場	菩薩頂
自六、一 至六、五	六、二五 六、二九	日本大蔵経入山大法要	碧山寺
六、六	六、三〇	日本大蔵経入山大法要故福田宏一氏慰霊祭	漢蔵仏学院
六、七	七、一	全	蒙蔵仏学院
六、一二	七、六	新民仏教青年大会日本求法僧慰霊祭	顯通寺
六、一三	七、七	和平祈祷支那事変殉難者英霊慰霊祭	顯通寺
		東亜仏教徒大会	顯通寺
六、一四	七、八	菩薩頂跳鬼	菩薩頂
六、一五	七、九	菩薩頂ヨリ行列羅睺寺へ跳鬼	羅睺寺
自六、一六 至六、二五	七、一〇 七、一九	五頂ニテ和平祈祷法要	各頂
自六、一六 至六、二〇	七、一〇 七、一四	日本大蔵経入山大法要	鎮海寺
自六、二一 至六、二五	七、一五 七、一九	全	顯通寺
自六、二六 至六、二九	七、二〇 七、二三	全	塔院寺
未定		通俗講経	十方堂

(※一行空白)

このように、ごく簡略なものであるが、陰曆の六月一日から六月二十九日まで、一ヶ月間をかけて行われたこの年の六月大会がどのようなスケ

ジュールで行われていたか、すべて知ることが出来る。六月大会の開催期間は、日比野の解説では本来は十日間だとみられるから、復興後はその規模を拡大して行うことに変更されたのかもしれない。そして、大会の幕開けとともに、日本から大蔵経を運び入れて入山法要が行われたのであり、それはあたかも日本式仏教の五台山への逆輸入を象徴する、一大デモンストレーションであった、と言つてよい(挿図4)⁽⁴⁹⁾。さらに、これにひきつづき、山内の中心にある顕通寺において、貫式も参加したという日本人留学僧の慰霊祭や、日華事変の殉難者慰霊祭、東亜仏教徒大会⁽⁵⁰⁾といった行事が立て続けに行われているが、「山西省スクラップブック」には、「五台山六月大会東亜仏教徒大会宣言」と題されたプリントがあり、それには日本文、華文、チベット文、モンゴル文でそれぞれ宣言文が記載されているほか、同じく貼付された「東亜仏教徒大会式次」にも、日本仏教徒代表、中国仏教徒代表、西藏仏教徒代表、満州仏教徒代表、蒙古仏教徒代表とあつて、各民族の仏教徒の代表が順に挨拶を述べる構成で進められていたことがわかる。おそらく、五台山は「東亜新秩序」という日本を中心とした新しい東アジア構想を具現化する、そのための格好の舞台となる可能性を秘めていたのだと思われる。仏教というアジアに普遍的な思想に基づき、五台山という古くから複数の民族を集めてきた中国有数の聖地で、六月大会という華やかな宗教行事を復興することで人心をつかむ。五台山という場を、このような形で巧みに利用しようとする意図が、日本軍にはあつたのではないだろうか。果

たして、同スクラップブックには、「昭和十六年七月七日/日支事変戦没将士追悼慰霊祭/於大顕通寺」と貫式がキャプションをつけた大判の写真があつて、戦没者慰霊祭に参加した人々の姿が写っており(挿図5)、衣装からも実際に多民族が集結して慰霊祭が行われていたことが知られるが、その最前列に日本の軍人が陣取る光景は、まさに当時の日本が目指した新東亜世界の縮図として考えることも、あながち誤りではないだろう。⁽⁵¹⁾

おわりに

本稿では、「小川貫式資料」に基づいて、日中戦争下の五台山の動向を概観してきた。すなわち、その長い歴史が培ってきた宗教性を踏まえつつ、五台山という中国有数の霊峰を、日本が掲げた「東亜新秩序」を具体的に実現する場として利用したのであり、こうした企図のもとで、研究者たちが日本陸軍と連携しながら調査を進める、そうした環境が整えられていった、と類推できる。それでは、戦争というものが中国仏教史研究者の調査研究にどのように影響を与えたのだろうか。最後に、この点について、日本求法僧慰霊祭の中心人物とされ、貫式も小論をしたためた、平安時代の留学僧靈仙に注目して、稿を終えたいと思う。

近代以降、靈仙の研究史をたどると、二つの大きな再評価の機会があつたことがわかる。ひとつは、国宝保存会委員をつとめるなど、古美

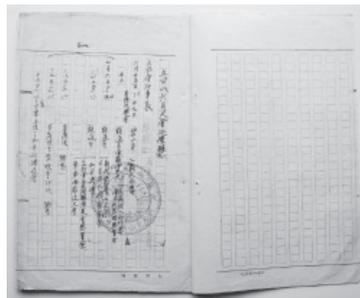
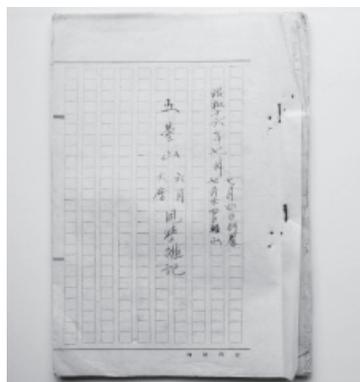
術保存事業への尽力で知られる荻野仲三郎が、大正二年（一九一三）、石山寺の経蔵で『大乘本生心地観経』を発見した時であり、第一巻の奥書に、長安醴泉寺において翻訳に中心的な役割を果たした訳僧としてその名前があり、靈仙は研究者間でグローバルに活躍した日本人留学僧として一躍着目を浴びることになった。そして、もうひとつが、この日中戦争下における五台山でのことである。ところが、最近では、史料上の問題から、本当に靈仙が中国で訳経僧の地位にあったか否かについて、疑問視する見方が有力になってきているという⁵⁵。もちろん、時代が異なれば、史料批判の方法もまた違ってくるのかもしれないが、日中戦争下、新東亜建設に都合のよい人物像が求められた結果、靈仙の事績の検証に偏りの出た可能性も、十分に考えておかなくてはならない。

同様の例は他にも散見される。太平洋戦争下の高丘親王や山田長政である。彼らは日本を離れ、マレー半島やシヤムに足跡を残したとされる歴史的人物であるが、当時の軍部はこうした南進の日本人を再発掘して、英雄視することで、戦意昂揚につなげていた⁵⁶。特に、皇族出身の求法僧であった高丘親王の場合、昭和十七年（一九四二）の日本軍によるシンガポール攻略に関わって、その翌年には国定教科書に登場することになった。身を賭して仏教を求法した、この皇族出身の一僧侶の行動を宣揚することで、青年学徒を奮い立たせようとした軍部の思惑がそこからは透けてみえるが、国定教科書に記された内容も含めて、そのことはこの当時の研究書に親王の事績として疑わしい記述がまま見受けられ

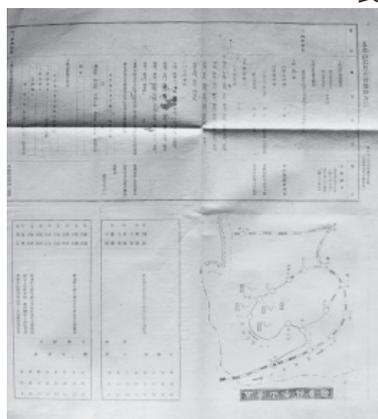
る、という結果をもたらすことになった⁵⁷。では、靈仙の場合はどうだろうか。たとえば、無名に等しかった靈仙の名が人名辞典に採用されたのが、戦争に突入した昭和十三年（一九三八）に出版された『新撰大人名辞典』⁵⁸であったことを渡辺三男氏が指摘しており、程度の差はあるにせよ、高丘親王や靈仙といった東アジアで活躍した歴史的人物が再発掘されていくのが、日中戦争から太平洋戦争にかけての時期に顕著であったことは、決して見落とされてはならない。中国はむろん、アジア各地を占領していくにあたり、婉曲的にはあるが、占領理由の一つとして、日本人ゆかりの地であることが求められるようになり、時にそれが大きく歴史人物や歴史史料の解釈を歪めることもあるのである。

貫式の五台山での滞在期間は二十日間であったが、貫式の自筆調査資料類からは、そのわずかな間に、大藏経の伝来状況の確認や金石文の採録など、精力的に調査を進めていた様子がうかがえる。貫式が真摯な態度で調査に臨んだことはいうまでもないが、靈仙の慰霊祭に参加できたことを、胸を熱くして語るその様子からすれば、彼もまた、時代に規定された研究者であった、とみることができるのである⁵⁹。

挿図1 西巖寺蔵「五台山六月大会雜記」



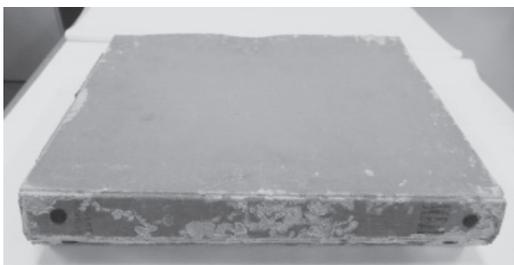
挿図3 西巖寺蔵「五台山六月大会参拝方法」
表



裏



挿図2 西巖寺蔵「山西省スクラップブック」



挿図4 西巖寺蔵「五台山写真」



挿図5 西巖寺蔵「五台山写真」



大正新修大蔵經奉迎行列

日支事変戦没将士追悼慰靈祭

註

- (1) 小川貫式「入唐僧靈仙三藏と五台山」(『支那仏教史学』第五卷第三、四号、昭和十七年)。
- (2) この靈仙は、八世紀、奈良の興福寺に止住して、法相教学を学んでいた僧侶である。法相宗を代表して遣唐学問僧に選ばれ、延暦二十二年(八〇三)、最澄や空海らと共に入唐し、最澄がわずか一年、空海でも二年で帰国したのに対して、この靈仙は二十年以上も唐に留まって、日本人ながら、当時の中国最先端の訳経場で翻訳事業に携わっていた、と推定されている。元和五年(八一〇)七月、長安の醴泉寺では、『大乘本生心地観経』の翻訳が始まったが、翌年には憲宗皇帝に献上されることになるこの訳経の場で、靈仙は訳語と筆受という重要な役を兼職していたという。後に、靈仙は長安を離れ、五台山に移り、そこで客死しているが、彼が中国宮廷の内道場に内供奉僧として奉仕していたことは、五台山での靈仙の跡を慕って、円仁が『入唐求法巡礼行記』に「日本国内供奉翻経大德靈仙」と書き付けていることからわかる。しかし、最近では、こうした靈仙の事績について見直しも検討されている。
- (3) 文末の「小川貫式略年表」を参照のこと。
- (4) 笠原十九司『日本軍の治安戦―日中戦争の実相』(岩波書店、平成二十二年)。
- (5) 岐阜県各務原市持田に所在する浄土真宗本願寺派の寺院である。
- (6) 同朋大学仏教文化研究所では、二〇一六年度、計五回にわたって西厳寺調査を行った。その内訳は次の通りである。第一回調査・二〇一六年三月三日。第二回調査・二〇一六年六月二十六日。第三回調査・二〇一六年七月十五日。第四回調査・二〇一六年九月二十二日。第五回調査・二〇一六年九月二十六日。なお、西厳寺の現住職であり、貫式の長男でもある小川徳水氏によって、「小川貫式資料」の大半は個別に紙袋に入れられてはいたが、徳水氏自身、場合によってはこれを廃棄する、という考えをお持ちであったため、今回、これらを

当研究所の発見した新出資料とさせていただき、悉皆調査に着手した。ところが、貫式の自筆原稿類が一転して調査対象となったことで、紙袋に入れられていたもの他にも、次々と資料として扱うべきと思われるものが出現し、現在もまだなかなか全貌が見えていない状態にある。今後ひきつづき調査を続け、将来的には目録を作成し、画像データベース化して、紀要やデジタルアーカイブス上で公開していく予定である。

(7) スクラップブック類に貼られた写真や絵葉書などを一点の資料としてカウントするかどうか、今後のデータベース構築の過程で方針を決めていく予定であるため、現段階では資料数について明確に提示できない。ただし、写真の内容はかなり貴重であると予測されることから、現段階ではこれらを含めて約千点としておきたい。

(8) 西厳寺には「小川貫式資料」のほか、大谷探検隊関係の「橘瑞超資料(敦煌文書)」や、貫式自身が日本で蒐集した大蔵経の断簡類があり、これらについては今までも研究者の間で注目されてきた。特に、大蔵経類の断簡は、京都大学人文科学研究所の梶浦晋氏によって、写真撮影され、コレクションの大きな把握がすでになされている。また、貫式が中国留学時に入手した各種拓本類のうち、龍門石窟に関するものについては、龍谷大学アジア仏教文化研究所の佐藤智水氏によって、京都大学人文科学研究所、東京文化財研究所に蔵されている同種拓本との比較分析調査が進められている。

(9) たとえば、『支那仏教史学』は当時の学界の動向について、「支那仏教の総合概括的の業績の出現」、「日本仏教の源流としての、東亜文化圏内の存在としての、支那仏教の生成発展を考へ、それが日本仏教に如何に関連をもつたかという点に着目して、日支仏教の交渉の問題を考究したものが多かつた」と述べている。「昭和十五年の支那仏教史学界点描」(『支那仏教史学』第五卷第二号、昭和十六年)。

(10) 彼らは外務省文化事業部の研究員として中国留学の機会を与えられたほか、さらに東方文化研究所も支援を受けていた研究者たちである(日比野丈夫・小野勝年『五台山』東洋文庫593、座右宝刊行会、昭和十七年。なお、本稿では、平成七年に平凡社から発行された新

版を使用した。小野勝年・日比野丈夫「五台山の現在と過去」(『日華仏教研究会年報』第五号、法蔵館、昭和十七年)。なお、貫式にはこの「五台山」の書評を記したものがあつた(『支那仏教史学』第七卷第一号、昭和十八年)。

(11) 浄土真宗本願寺派からは、塚本洗月、西谷順誓、三上諦聴、池尻糸導、高原一、大谷派からは吉兼正安、藤井弘、菊地宣正、真言宗からは、酒井眞典のほか、稲葉慶立、臨濟宗からは河野弘、天台宗からは櫻井圓信、曹洞宗からは松島正見、浄土宗からは平川博道らの各氏が入山したことが、三上紀行文の内容からわかる(三上諦聴「五台山紀行」『支那仏教史学』第四卷第三号、昭和十五年)。

(12) 注10日比野・小野前掲書。注11三上前掲文。注11三上前掲文。なかには、小野勝年や和島誠一のように、軍部との関係を冷静に観察する研究者もいる。すなわち、小野は紀行文の末尾で、「今日我々が五台山を訪れても、全く古い遺物や遺蹟に接することが出来ない。(中略)しかし注意しなければならぬのは、たとひ物はなくともそこに流れてゐる伝統の力である。五台山は未だ生きてゐると思ふ。今では蒙古人の勢力は衰微して、彼等にその復興は期待出来ないとしても、いつかは又この千数百年の伝統が新たな息吹をふき返すときが来るであらう。それは、新たに勃興する蒙古人によつてか、また普濟仏教会の如き漢人の教団によつてか。何れは未来が解決するであらう。現在たゞ一つ対五台山政策の上に於いて考へるべきことは、五台山がその最も熱烈なる信者を有してゐるところの蒙疆にはなくて、北支那にあるといふ矛盾なのである」と皮肉を述べているし(注10小野・日比野前掲論文、考古学者の和島誠一もまた、「一番大きな教訓は、山西省で人民に背を向けられてゐる調査が、いかに困難でみじめなものであるかを痛感させられたことです。侵略者の銃剣に守られる立場に身をおいたことは致命的でした」と、山西省での調査を冷静に振り返つてゐる(和島誠一「国民に背を向けた発掘と国民とともにする発掘」『歴史評論』第九十六号、昭和三十三年。後に『日本考古学の發達と科学的精神』所収、和島誠一著作集刊行会、昭和四十八年)。

(14) 宮本敏行「山西學術紀行」(新紀元社、昭和十七年)。宮本は朝日新聞社の従軍記者であつた。注13和島前掲書。水野清一・長広敏雄「雲崗石窟—西曆五世紀における中国北部仏教窟院の考古学的調査報告—東方文化研究所調査、昭和十五年—二十年」京都大學人文科学研究所報告(京都大學人文科学研究所雲岡刊行会、昭和二十七年—五十年)。近衛文麿内閣。

(15) 挿図1で示した「五台山六月大会見学雜記」には、旅程や見学先の予定が簡略に記されてゐるが、貫式の実際の五台山における足跡をここからはたどることはできない。また、「五台山金石刻文備忘録」と題された自筆原稿があり、あるいはここには五台山での調査経緯が記されていたかとも推測されるが、残念ながら現状では表紙一枚のみしか残されていない。今後の調査での発見に期待したい。

(17) とともに日付は示されていないが、草稿についてみると、使われている原稿用紙が、昭和十六年の日付を持つ、他の五台山での自筆調査メモと共通することから、おそらく五台山調査の前後に中国にて執筆したものだとも推測できる。

(18) 三上諦聴もまた、「今回は治安の関係上単独に走り廻れず、何れも広大なる地域に点綴した結果、個人の調査が余りにも小さく、聖地五台山研究には団体的なる総合的研究の必要を痛感、今更乍ら大陸の大陸的なる感を深くしたものである」と、五台山について総合的な研究の必要性を提言している(注11三上前掲文)。

(19) 「五台山図録」五台山地勢図 日本陸軍參謀本部「台懷鎮」——唐代五台山壁画 甘肃燉煌石窟第一百十七壁画三枚 ペリ才燉煌図録所収／宋・元・明五台山図繪 未調査／清 康熙五台山景境山圖 康熙三十六年周三進修纂五台山志所収圖／雍正五台山圖 欽定古今圖書集成山川典卷三十一所収圖／乾隆五台山圖 乾隆四十年王秉韜纂修五台山志所収圖／光緒五台山圖 光緒九年孫汝明修五台山志所収圖／中華民國五台山写真集成。

(20) まだ調査段階ではあるが、この小川貫式による『清涼山五台山叢書』は、おそらく刊行されなかつたとみられる。

(21) 『陣中新聞』七〇九〜七二三号(昭和十六年)。

(22) 『朝日新聞』北支版・昭和十六年九月二十七日号。本稿への引用は「山西省スクラップブック」に貼付された記事切り抜きによる。本論では中略したが、引用した記事には、貫式発見の資料について、以下のように詳細に説明を続けている。

ことに西夏文蔵経扉画中に書き綴られた三行の西夏文字二十九字は今を去る五「七・貫式修正」百余年前西夏国盛んなりしころ、同国王李元昊と野利仁榮なるものの創案といはれ、元の大徳年間、松江府僧録管主八が王旨をうけ中支杭州路大万寿寺において影印せる龐大三千六百二十余巻の経本の扉画で護「讀・貫式修正」法図の一部分と天牌の一頁とが塵埃山積の同寺反古中より発見されたもの、西夏文字二十一「九・貫式修正」文字は西夏学究明の貴重資料として垂涎措く能はざるものである。

また日本国僧慶政補刻大方広仏華嚴経巻第二、拱二は約七百二十年前南宋の寧宋、嘉定年間（わが鎌倉時代）の作といはれ福州開元寺版大蔵経の一冊でその第十三頁「紙・貫式修正」末尾に「日本国僧慶政捨」の七文字が施版刊記されてゐる、これによれば慶政は当時わが国より渡支し福州に大蔵経を求めて托鉢したがその板木の毀損せるもの多く、ために自ら旅費の一部を割き版をつくり、その修理補刻をなしたのであつた。

わが宮内省図書寮の旧西山法華山寺蔵福州版大蔵経の華嚴経巻二「二・貫式修正」十二、涅槃経巻三十二には日本国僧慶政の喜捨版なることが記されてゐるが、いまだこの経中に日本国僧の名が明記されてゐるや否やを知るに由なく仏教界に多大の疑問と期待を抱かれてゐたものであつた。

(23) 「山西省スクラップブック」には「太原博物館案内」という小冊子も貼付されている。ただし、この案内は貫式発見の諸資料が収蔵される前に作成されたものらしく、新聞で報道された経典類についての掲載はない。また、現在、これらの資料がどうなっているかについては未確認である。

(24) 編集者のところに「五台山六月大会事務局編（新民会山西省総会内）」とある。

(25) 新民会設立時の「章程」には、創設の目的として「日滿支の共榮を顕現し、剿共滅党の徹底を期す」とあつて、日本軍に協力し、抗日の共産党と蒋介石の国民政府を滅亡させることが謳われている（石島紀之「新民会」、「アジア・太平洋戦争辞典」、吉川弘文館、平成二十七年。王強「日中戦争期における新民会の厚生活動をめぐって」、「現代社会文化研究」第二十五号、平成十四年）。

(26) 「山西省スクラップブック」に貼付された、山西省五台山六月大会後援会発行のチラシ「五台山六月大会告民衆書」にも同様に、参拝要項として、六月二十五日から七月九日にかぎり、「火車」の代金、すなわち汽車賃を減価すること、それには各地の新民会発給の参拝証明書が必要なが明記されている。

(27) 「本年五台山六月大会之特異性」の全文は以下の通りである。

六月大会之中心為菩薩頂之勝会即所謂誓願会自不待言
但本年之六月大会有与往年鮮見之特異性是即於五台山各寺院及仏学院奉行大蔵経入山之慶讚大法会

此次入山之大蔵経為高楠順次郎博士監修之大正新修大蔵経家日本大阪市「贈大蔵経奉讚会」贈送者正編五十五巻為現在難得之宝典其發起者為故福田宏一居士以一、日本仏教文化之海外宣揚 二、与海外仏教徒之親善 三、对印度中国日本仏教会之報恩主旨發起寄贈此大蔵経於諸名利之誓願由大正十五年頃親雲遊勤道於日本内地滿州蒙古中国等地尚不願以此事誓帰功於一身發起贈大蔵経奉讚会方奔走中於昭和十一年十一月仙逝大阪【改行ママ】

奉讚会経福田寿美子未亡人中井玄道師丸山義淵師及其他人之尽力得繼承福田氏之遺志於昭和十二年五月贈滿州国新京般若寺一部昭和十六年二月末北京仏教同願会中国仏教学院山東省青島湛山寺仏学院各一部献経既已到達而寄贈与五台山漢蔵仏学院者於昭和十六年四月十六日到達山西省太原予定於六月二十五日送置五台山菩薩頂此次本故福田宏一氏之誓願蒙贈大蔵経奉讚会贈送宝典对此尊貴之献経為酬謝盛意於五台山六月大会中在各寺院奉行大蔵経入山慶讚大法会

(28) 西厳寺現住職の小川徳水氏の言による。

- (29) 京都大学地域研究統合情報センター「華北交通アーカイブ」(<http://codi.rois.ac.jp/north-china-railway/>)
- (30) 『五台聖境』(中華民國新民会、発行年不詳)。(一)写真、(二)事変後の五台山、(三)五台山的沿革、(四)新民会的使命」といった章立てとなっていて、写真には「五台三六月大会盛況」「五台山六月大会実況」「新民会工作の一部」とキャプションが付されている。注11三上前掲文。
- (31) 浄土真宗本願寺派の執行であった梅原真隆は、興亜について、大東亜建設のために物心両面で国家に「奉公」することだと述べている(梅原真隆「興亜精神と仏教」、『教海一瀾』一九三九年八月二五日号、昭和十四年)。
- (32) 講演のための下書きではないか、と類推される。
- (33) 昭和十四年(一九三九)、西本願寺法主の大谷光瑞が「興亜奉公の消息」を出し、興亜促進運動を推進している。
- (34) 注1小川前掲論文。
- (35) 「崇善寺蔵経調査備忘録」「太原崇善寺所蔵宋元版大蔵経存欠調査日記抄」など。詳しくは、本報告の史料紹介を参照のこと。
- (36) 注11三上前掲文。
- (37) 注11三上前掲文。
- (38) 注11三上前掲文。
- (39) 三上は酒井について「外務省特別研究員にて旁特務機関の嘱托^[マ]として活躍中の西蔵仏教の専門家」と記述している(注11三上前掲文)。
- (40) 野世英水氏のご教示によると、南京の憲兵隊でも僧侶を軍の職員として採用して、効率を図った例があるという。
- (41) 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編「興亜院と戦時中国調査 付刊行物所在目録」(岩波書店、平成十四年)。
- (42) 三上の紀行文に記されていた、崑崙城内の特務機関司令部で五台山の現状と「仏教工作」の高見を聞いたという記述が想起される(注11三上前掲文)。
- (43) 注10日比野・小野前掲書。他にも、この大会中、最も人気を博した跳鬼という出し物について言及している。
- (44) 注10日比野・小野前掲書。「蒙古、西蔵は勿論、満州や華北各地から

- も牛、羊、馬、驢、騾等の家畜を率いて入山し、これが買付けを目的に漢人が多数にやって来るので、かつてはその売買は繁盛を極めた。もとよりその時には漢人の市も立って、西蔵人や蒙古人は家畜を売って、その代りに茶を初め日用雑貨や食料品などを買って行ったであろう。その交易場は、いつも台懷鎮の東、清水河の河原と定められていた。これに対して課せられた税金の額だけでも莫大なものと称せられるから、その交易の総額はまた推して知るべきものがある」と言及している。
- (45) 近代銀行の発祥地は山西省の平城である。道光四年(一八二四)に平遥で創業した日昇昌は、現在、中国票号博物館として公開されているが、清国で初めての個人金融機関で、これが近代銀行の前身であるとされている。
- (46) 「山西省スクラップブック」には、「忠告八路軍士兵書」あるいは「告晋綏軍將士」とした、五台山六月大会を宣伝したビラのようなものも貼付されている。そこには「趁著五台山六月大法会 抛去槍桿懺悔礼仏」とあり、十五cm×十cmといった小さなサイズであることや、文殊菩薩の大誓願会を機会として降伏を呼びかける内容になっていることから、山間部に撒かれたビラではなかったかと想像される。
- (47) 新藤篤史「17世紀末、清朝の対モンゴル政策―康熙帝の五台山改革を中心に―」(『大正大学大学院研究所』第三十八号、平成二十六年)。これは新民会が中国各地で行った文化政策と同様の効果を狙ったものと推定できる。川島真「華北における「文化」政策と日本の位相」(『東洋文庫超域アジア研究部門現代中国研究班(平野建一郎)編「日中戦争期の中国における社会・文化変容」(東洋文庫、平成十九年)』)の論文は、新民会を中心に、日本の占領地における文化政策について検討したもので、戦時体制下の日本は共榮圏の建設のため、日本精神を受容させることで、それを身につけた者を対日協力者として体制に組み込むことが企図されたことが指摘されている。
- (49) 奉迎の行列写真は「山西省スクラップブック」にも貼付されていて、貫式のキャプションには「菩薩頂、中台ヲ望ム 大正新修大蔵経／

奉迎行列」とある。

(50) 昭和十四年(一九三九)二月、上海で中支宗教大同連盟が結成された。形式的に、総裁として近衛文麿、副総裁に大谷光瑞を推戴する組織で、神道部、仏教部、基督教部、総務局を置いていたという。仏教部の部長には福田闡正が選出され、この仏教部が計画をした大きな事業が東亜仏教大会であったという。(松谷暉介「日中戦争期における中国占領地域に対する日本の宗教政策―中支宗教大同連盟をめぐる諸問題―」、『社会システム研究』第二十六号、平成二十五年)。

(51) 日本文の内容は以下の通りで、これを漢・西蔵・満州・蒙古という各民族の母国語にそれぞれ翻訳して配布されたとみられる。

一、我等ハ東亜仏教徒タルノ大自覚ニ基キ四海同胞ノ仏教精神ヲ体シ「破邪顕正」ニ邁進ス

一、我等東亜仏教徒ハ万古不滅ノ妙道ニ依リ弥々盟契ヲ固クシ世
界平和ノ確立ニ貢献ス

一、我等東亜仏教徒ハ興亜ノ為殉難セル幾多ノ靈ニ感謝シ聖地五
台山ニ「東亜之礎石」(忠霊塔)を建設ス

(52)

式次第の内容が以下のようなものである。
東亜仏教徒大会式次

地址 於顕通寺大雄宝殿前

日時 陽七月七日 陰六月十三日 下午一時

一、全体蕭立

二、奏楽 (1) 青廟 (2) 黄廟

三、向中日両国旗暨釈迦牟尼仏敬三鞠躬礼

四、日本仏教徒代表挨拶……………未定

五、中国仏教徒代表挨拶……………□福

六、西蔵仏教徒代表挨拶……………阿□□□

七、満州仏教徒代表挨拶……………□増□□

八、蒙古仏教徒代表挨拶……………丹僧仏

九、来賓祝詞

十、決議之朗読

十一、誦三帰依文(一) 奏楽 (A) 青廟 (B) 黄廟

十二、閉会

(53) ちなみに、最前列、壇上の中央の人物はその相貌から多田駿ではないかと推定できる。その他にも、『多田大将／菩薩頂参詣』「多田大将／華語訓話」と貫式がキャプションを付けた一枚もある。多田は、日中戦争の非拡大派で、日中戦争が勃発する以前、日中間で戦争をすることが両国民にとつていかに不幸なことであるかを唱え、涙ながらに日中和平を主張した人物である。その後も、日中和平の道を模索し続け、東条英機と対立したことで名将として知られるようになったが、『岩井秀一郎』『多田駿伝―日中和平』を模索し続けた陸軍大将の無念、小学館、平成二十九年)、もし本当にこの写真に写っているのが多田駿だとすれば、陸軍屈指の中国通が、この時期、六月大会のために五台山入りして各行事に参加していたことになり、大変に興味深い。

(54)

これ以降、多くの先学によつて、靈仙に関する研究が発表されていくことになるが、たとえば、大正四年(一九一五)、今津洪獄氏が『一乗要決』巻下によつて靈仙が興福寺僧であることを示し(今津洪獄『日本国翻経沙門靈仙筆受心地観経に就て』(『仏書研究』第七号、大正四年)、大屋徳城氏が『法相燈明記』という新出史料によつて延暦二十二年(八〇四)に靈仙が入唐したと推定するなど(大屋徳城『日本国訳経沙門靈仙三蔵に関する新史料』(『無尽灯』第二〇巻第一号、大正四年)、後に加筆して『大屋徳城著作選集・第二巻 日本仏教史の研究一』に所収、国書刊行会、昭和六十二年)、靈仙に関する史料が提示され、それに基づいて新知見が加えられていくことになる。

(55)

靈仙については別稿で改めて論じることにした。

(56)

矢野暢『日本の南洋史観』(中公新書、昭和五十四年)。

(57)

佐伯有清「虚実」に揺れる高丘親王」(『高丘親王入唐記 廢太子と虎害伝説の真相』、吉川弘文館、平成十四年)。

(58)

『新撰大人名辞典』第六卷(平凡社、昭和十三年)。後に『日本人名大事典』と題して復刻されている。

(59)

渡辺三男「靈仙三蔵―嵯峨天皇御伝のうち―」(『駒沢國文』第二十

四号、昭和六十二年)。渡辺氏によると、明治十九年(一八八六)の日本最初の人名辞典である『大日本人名辞書』(嵯峨正作編『第日本人名辞書』(経済雑誌社、明治十九年)以来、靈仙の名はこの種の辞典類には採録されてこなかったという。

貫式が調査を行った昭和十六年(一九四一)当時、治安戦の名のもと、すでに山西省全域が日本軍による大量殺戮や収奪行為の脅威にさらされていたことを思うと、戦況をほとんど感じさせない貫式の記録には、むしろ驚きを感じざるをえない。戦時下では宣撫工作といって、占領地住民の協力的な態度を引き出すため、治療施設や教育施設がしばしば設置されており、貫式を中国に派遣した西本願寺でも、軍から土地や建物を提供され、布教拠点として各地に出張所や、中国人僧の養成所として南京仏学院を開設したことを考えると、こうした仏教を介した戦時下の取組みが、あるいは中国で調査をする貫式にとって良い方向に影響していたのかもしれない。(同朋大学仏教文化研究所編『戦時下の中国仏教研究―西厳寺蔵「小川貫式資料」と山西省調査記録』、同朋大学仏教文化研究所、平成二十八年。藤井由紀子「日中戦争下の留学生―小川貫式資料から(上・下)」、『中日新聞』平成二十九年三月二十八日号・四月四日号掲載予定)。

執筆者紹介

- 小山正文（研究顧問）
新野和暢（客員研究員 名古屋大谷高校教諭）
市野智行（客員研究員 本学非常勤講師）
木越祐馨（加能地域史研究会代表）
藤井由紀子（所員）
中川剛（客員研究員 愛知学院大学 博士課程後期）
高木祐紀（客員研究員）
小川徳水（西嚴寺住職）
工藤克洋（客員所員 京都産業大学史編纂室嘱託員）
松金直美（客員所員 真宗大谷派教学研究所助手）
脊古真哉（客員所員 本学非常勤講師）

同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十六号

平成二十九年三月二十五日 印刷

平成二十九年三月三十一日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一

編集者 同朋大学佛教文化研究所

幹事 安藤 弥

電話 ○五二―四一―一三三七三

発行所 同朋大学佛教文化研究所

印刷所 株式会社 カミヤマ